

雑 報

和歌山高商の20センチ赤道儀

和歌山高等商業學校に於ては御大典記念事業の一つとして天體望遠鏡を設置する事となり、去る一月中頃設置を終つた。光學部分品はチャンス硝子材を使用せる中村鏡にて、有效徑 203 ミリ、焦點距離 170 センのものである。接眼レンズは 25, 12.5, 9, 6 ミリの四個を具へ、サングラス、及びムーングラス二個づつある。ファインダーは徑 30 ミリのもの二個である。臺架は西村製作所に於て製作し、方位及び緯度修正、度盛環、筒廻轉装置を具へた固定型の赤道儀であつて、重量約 80 貫である。時計仕懸は無いがフック、ジョイントによる微動運動を裝置してある。望遠鏡は同校圖書館屋上三階の見晴らし絶好の位置に設置せられ、レール上に押出し得る覆に收められて居る。總費用 900 圓、高等商業學校に大きな望遠鏡を設置せる事、最初の提案者が天文に縁の無さそうに見える文學士加川教授である事、硝子材を除いて一切が國産品である事が從來の望遠鏡に比し異彩をはなつて居る。(N)

5 月 9 日の皆既日蝕について外國側の報告

5 月 18 日發行の Nature 誌上に、去る 5 月 9 日の日蝕觀測に關する、次の如き意味の一文があつたから御紹介します。(I)

不幸にして、アロアスター及びバタニに於ける英國觀測隊からの報告は甚だ失望すべき物であり、殊に後者にては濃雲の爲め何等收獲なく、前者では僅かに薄雲を通して數枚の寫眞を撮影したのだが、此等は價值が少なくはないかと思はれてゐる。

併し幸にして、マストラ及びフィリッピンでは、より良い状態にあつた。フィリッピンのイロイロにはワシントン、海軍天文臺、ハンブルグの米・獨隊が居り、2 人の英人の觀測者(ヲオターフヒルド博士ミロイド氏)が居た。此處では稍々高層に卷雲があつたが、その爲め觀測が妨けられた様ではな

かつた。そして鮮やかな旗状のプロミネンスが撮られ、米國人は「星條旗に似てゐる」と言つてゐる。コロナは極大期型であり、六本の流線を認める。ヲオターフィールド博士は、此のコロナは1927年6月の時より、より輝き、より擴がつて居り、且つ皆既中の暗さは、其時程ひきくなかつたを報じてゐる。彼は5月11日のデイリー・ニュース誌上に、赤外線乾板で薄雲を通じて、コロナのはつきりした外形を撮影し得たを發表してゐる。ワシントン隊は皆既中の模様を活動寫眞に撮影したが、未だ現像されてゐない。

スマトラに於ける隊の中、或る者は曇られ、或る者は成功した。日食觀測に成功した回数ではレコード・ホルダーだと言はれるスワス・モオア天文臺長ミラー教授は焦點距離65呎カメラでコロナの撮影に又た成功した。此の乾板ミクロイロで撮られた乾板を比較すれば、1時間の間にコロナが如何に變化したか、明らかにされやう。ポツダムのフロインドリツヒ教授は觀測成功を報じてゐる。同教授のはアインシュタイン原理の研究である。此問題は未だ相對原理の論文が出版される前、大戰前から彼が從事してゐたものである。今世紀に入つて、スマトラでの日蝕觀測が成功したのは此れで三回になつた。即ち1901年と1926年と本年と。

尙ほ、ロイテル通信に依れば、アロアスターに於けるジャクソン博士は次の如く發表してゐる。現像した乾板を見るに、以前の豫想よりよく撮れてゐる。透明度はギグルスキツクのご等しい。數個の美しいプロミネンスの内、殊に1個は長さ15萬哩、高さ10萬哩のアーチ型である。コロナ内の速度を測る装置は十分であつた。

新しい天文學士

去る三月、京都帝國大學の天文部に於いて、山村清、森川光郎兩氏が卒業され、山村氏は天文學教室の副手に、又、森川氏は同助手になられた。兩氏共に本會員である。

東京天文臺でも今年、鴻巣要一郎、鈴木敬信、堀鎮夫、森清、矢崎信一の五氏が卒業された由。

ジャバで開かれた第四回太平洋 學術會議の天文部の状況

去る五月十六日から南洋ジャバのバタビヤ及びバンドン市で開かれた第四回太平洋學術會議は、各國より集まる者約四百名、うち日本の代表者四十三名といふ壯んな勢であつた。其の中の天文部會は二十四日午前九時からバンドン工業大學第6番室で開かれた。之れには、其の土地のレンバン天文臺からファウト Voute 臺長やクライケン Kreiken 博士が出席され、外國からは米國のミラー、カーテス、獨國のフロインドリヒ夫妻、我が國早乙女博士及び山本博士夫妻、支那のゲルマルケ師や余青松教授等が純天文家として出席されたが、ほかに他の學部から傍聴に來た人々もあつて、出席は全部で約二十名であつた。

始めに、世話役のフイサー Visser 氏(バタビヤ氣象臺副長)の主唱で、早乙女博士が座長に推され、下のプログラムで論文が發表された。

フ ラ シ ユ (F. Brachet)氏, Sur un appareil d'enseignement de la cosmographie.

ク ラ イ ケ ン (E. A. Kreiken)氏, Some remarks on spectroscopic binaries.

ミ ラ ー (J. A. Miller)氏, Some eclipse problems.

早乙女清房氏, On the difference of longitude between Tokyo and Vladivostok.

ワレンキスト (A. Wallenquist)氏, On the masses of the stars in clusters and their relation to the theory of Eddington.

同 上 (同上), Some remarks on the frequency curves for white stars in open clusters.

山本一清氏, Index of sun-spot activity.

同 上, Total eclipse solar of May 9, 192. (Preliminary report of an expedition.

余 青 松 氏, A photometric study of stellar spectra.

上記のうち、フラシエ氏とワレンキスト氏は缺席で、論文は讀まれず、又、早乙女氏も時間が無くて論文を讀まれなかつた。ミラー氏の演説についてフロインドリヒ氏が批評と意見とを述べられたのは面白かつた。

會合は正午十二時に閉ぢられた。

因みに、此の日の前日、レンバン天文臺では臺長主催の御茶の會があつたので、百餘名の代員たちが之れに参加した。